

# 負傷した線路と月

小川未明

青空文庫



レールが、町まちから村むらへ、村むらから平原へいげんへ、そして、山やまの間あいだへと走はしつていました。

そこは、町まちをはなれてから、幾いく十マイルとなくきたところでした。ある日ひのこと、汽車きしゃが重い荷物にもつや、たくさん人間にんげんを乗のせて過すぎていきましたときに、レールのある部分ぶぶんに傷きずがついたのであります。

レールは、痛いたみに堪たえられませんでした。そして泣ないていました。自分じぶんほど、不運ふうんなものがあるだろうか。毎日まいにち、毎日まいにち、幾いくたびとなしに、重おもい汽罐車きかんしゃに頭あたまの上うへを踏ふまれなければならない。汽罐車きかんしゃは、それをば平気へいきに思おもっている。そればかりでなく、太た

陽が、身を焼くほど、強く照らしつける。日蔭にはいろいろとあせつても自由に動くことができない。太い釘が自分の体をまくら木にしつかりと打ちつけている。考えてみると、いったい自分の体というものはどうなるのであろうか……と、レールは、思つて泣いていました。

「どうなさつたのですか？」と、そばに咲いていた、うす紅色をしたなでしこの花が、はじらうように頭をかしげてたずねました。

いつも、この花は、なぐさめてくれるのであります。こういわれて、レールはうれしく思いました。

「いえ、さつき、汽罐車が、傷をつけていったのです。たいし

た傷きずではありませんけれども、私わたしは、身みの上うえを考かんえてつくづく悲かなしくなりました。それで泣ないていたのです。」と、レールは、答こたえました。

「まあ、そうでしたか……。あなたのような、強つよい方かたがお泣なきなさるのは、よくよくのことでございましょう。私わたしどもだったら、どうなつてしまつたかしれない。そういえば、さつきたくさんの材ざい木もくと、米こめだわらと、石せき炭たんと、なにかの箱はこを、いっぱい貨か車しゃに積つんでいきました。そして、今日きょうは客きやく車しゃもいつもより長ながかつたようでございました。山やまのあちらには、海うみがあり、また、温おん泉せんなどもありますから、そこへいく人ひとたちでにぎわつていたのでしよう。それにしても、あなたあなたの傷きずが、たいしたことがあり

ませんでした、ようございしましたこと。」と、花は、しんせつにいいました。

レールは、きらきらと光る顔を花の方に向けて、

「やさしいあなたが、私をなぐさめてくださるので、どれほど、私は、うれしく思っているでしょう。あなたが、すぐ近くで咲かない時分はどんなに、私は、さびしかつたでしょう……。」「と、日ごろは、いたって強く黙っていて、辛抱しているレールは、つい涙ぐましい気持ちになりました。

すると、うす紅色をした花は、いいました。

「しかし、私の命もそう長くはありません。このあつさで、私の体は、弱っています。長いこと雨が降らないのですもの。」と、

歎なげいたのでした。

このとき、風かぜが、レールの上うえをかすめて、花はなを揺ゆすつていったのであります。

レールは、耳みみをすましながら、

「夕ゆう立だちがやつてきそうですよ。遠えん方ぼうで雷かみなりが鳴なっています。そ

れは、あなたの耳みみには、はいりますまい。ずっと遠とおくであります

から。けれど私わたしどもは、こうして長ながく、つづいていきますので、そ

の音おとが伝つたわって聞きこえてくるのです。」といいました。

花はなは風かぜに吹ふかれながら、

「ほんとうでしようか。そうであれば、どれほど私わたしはうれしいか

しれません。」と答こたえました。

このとき、花を吹いている風が良かったです。

「ほんとうですよ。今日は、こちらも降るでしょう。もうすこしたつと、雲がぐんぐん押し寄せてきて、あの太陽の光を隠してしまえますから。」と、知らしてくれました。

レールは、熱くなった体を、早く水に浴びて冷したいと思いましたが。また、花は、早く、水を吸って死にそうな渴きをば、いやしたいと思いました。

しばらくすると、はたして、黒い雲や、灰色の雲がぐんぐんとあちらから押し寄せてまいりました。そして、青々としていた空をすくすく征服して、いつしか太陽の光すら、まったく見えなくなってしまったのです。



焼けるように、赤くいろどられていた野は、急に涼しく、うす暗くかげつたのでした。その時分から雷の音は、だんだん大きく近づいてきたのでした。

レールも花も、声をたてずに、ものすごくなくなった空の模様をながめていました。雨がとうとう降ってきたのであります。雨は花に降りそそぎました。また、レールの上に降りかかりました。そしてレールの熱くなった体を冷やして、その傷痕を洗ってやりながら、「まあ、かわいいそうに……。」と、雨はいいました。

レールは、涙ぐみながら、雨に向かって、今日、冷酷な汽罐車に傷つけられたこと、太陽が、これまでというものは、まいにち、まいにち、用捨なく、頭から照りつけたことなどを話し

ました。すると雨は、こういいました。

「それは、お気の毒なことです。私はあつくなくていたあなたの体をひやしてあげました。私たちはもうじきにここを去らなければなりません。その後にはきつと月が出るであります。月は、太陽とはまったく気性がちがっています。そして、万物の運命をつかさどる力は、いまこそ太陽のようになくても、昔は、えらかったものだそうです。そのことを月に向かってお話しなさい。月は、あなたが訴えなされたら、けっして悪いように取りはからいはしなかりうと思えます……。」「と、雨は静かな調子でさとしてくれました。

はたしてほどなく雲が去り、そして降っていた雨は晴れてしま

いました。あとには、すがすがしい夕空ゆうぞらが青々あおあおと水みづのたたえられたように澄すんで見みえました。

その夜、平原へいげんを照てらした月つきは、いつも見る月つきよりは清きよらかで、その光ひかりのうちには、慈悲じひの輝かがきを含ふくんでいました。やさしい花はなは、雨あめにぬれたままうなだれて、早くはやから眠ねむつてしまい、そしてその葉蔭はかげのあたりから、虫むしの泣なく声こえが流ながれていました。

去さつていった雨あめは月つきにささやいてでもいったものか、月つきが、この平原へいげんを照てらしたときは、まずレールの上うえに、その姿すがたを映うつしました。レールは、月つきに向むかって、今日きょう、自分じぶんを傷きずつけていった汽き罐車かんしゃがあつたことを告つげたのであります。

「どんな汽罐車きかんしゃであるかしのれないけれど、そんなことをしてし

らぬ顔かおをしているとは冷酷れいこくな汽罐車きかんしゃである。私わたしがいつて不ふ心得ろえをさとしてやるから、もし見覚えみおぼがあつたら聞きかきなさい

。「と、月つきはいいました。

レールは、汽罐車きかんしゃの番号ばんごうを教おしえました。

月つきは、さつそく、町まちから村むらへ、村むらから山やまの間あいだへというふう

ちからちからのおよぶかぎり、レールの告つげた汽罐車きかんしゃをさがして歩あるいたの

です。ちようどその時分じぶん、鉄橋てつきょうの上うえを走はしっている汽車きしゃがあり

ました。月つきはその汽罐車きかんしゃではないかと飛とび下おりてみましたが、

番号ばんごうがちがつていました。

月つきは海岸かいがんという海岸かいがん、野原のほらという野原のほらをさがしてまわりま

した。そして、いたるところに汽車きしゃが走はしっているのを認みとめました。

貨車ばかりのもあれば、また客車に貨車がまじっていたのも  
 ありました。海岸では海水浴をしている人間もありました。  
 彼らは、「ほんとうに、いい月夜なこと。」といって、砂浜で  
 ねころんだり、また暗い波の中を泳いだりしていました。客  
 車の窓からは、人々が頭を出して、海の景色をながめながら、  
 笑ったり、話したりしていました。

しかし、この汽車の汽罐車も、月のたずねている番号では  
 ありませんでした。こうしてほとんど同じ時刻に、地上をたく  
 さんの汽車が走っていましたが、レールのいった汽罐車は、ト  
 ンネルの中へでもはいっていたものか、つい月の目にとまりませ  
 んでした。

涼すずしい一夜やを送おくつて、レールは、もはや、昨日きのうの苦痛くつうを忘わすれてしますいましたけれど、約やく束そくをした月つきは翌よく日じつの夜よるも、レールを傷きずつけた汽罐車きかんしゃを探さがしてまわつたのでした。すると、ある停てい車場やばの構内こうないに、ここからは、遠とおくへだたっている平原へいげんの中なかのレールから聞きいた番号ばんごうの汽罐車きかんしゃがじつとして休やすんでいまし

た。  
月つきは、さつそく、汽罐車きかんしゃの上うえへたどりつきました。そして、いつものように、静しずかな調子ちようしで、

「どうして、そんなに、沈しずんで、じつとしているのだ。」といつて、たずねました。

汽罐車きかんしゃは、月つきに、こういつて話はなしかけると、はじめで、

口を開きました。

「私はどんなに、疲れているかしれません。毎日、毎日、遠い道を走らせられるのです。そして昨日は、いまままでにない重い荷をつけさせられていたので、一つの車輪を痛めてしまいました。私は、あの重い荷物と車室の中で、そんなことには無頓着に、笑ったり、話したりしていた人間が、憎らしくてしかたがありません……。」と訴えたのであります。

「そんなら、おまえも、体をいためたのか？」と、月は問いました。

「そうです。どこかでレールとすれ合つて、一つの車輪を傷つけました。」と、汽罐車は答えました。

月は、それを聞く<sup>き</sup>と、だれが悪い<sup>わる</sup>ということができなかつた。

そして、レールを傷つけた<sup>きず</sup>といつて汽罐車<sup>きかんしゃ</sup>をしかることもできなかつたのであります。

「その荷物<sup>にもつ</sup>は、どこまで載<sup>の</sup>せていつたんですか。」と、さらに月<sup>つき</sup>はききました。

「どこといつて一<sup>ひと</sup>ところではありませんでした。大きな箱<sup>はこ</sup>は、港<sup>みなと</sup>の駅<sup>えき</sup>までつけていき、また石炭<sup>せきたん</sup>や木材<sup>もくざい</sup>は、ほかの町<sup>まち</sup>で降<sup>お</sup>ろしました。」と、汽罐車<sup>きかんしゃ</sup>はいいました。

「どうぞ、お大事<sup>だいじ</sup>に……。。」といつて、月<sup>つき</sup>はこんどは、港<sup>みなと</sup>の方<sup>ほう</sup>へまわつたのであります。すると、いま、汽船<sup>きせん</sup>が煙<sup>けむり</sup>をはいて出<sup>で</sup>ようとしていました。その船<sup>ふね</sup>には、大きな箱<sup>はこ</sup>がいくつも載<sup>の</sup>せられてあ



りました。月は、さつそく、船の上へやってきて、箱を照らしたのであります。

「これからどこへいくのですか。」と、月はたずねました。箱は、黙つて、物思いに沈んでいましたが、

「私たちは、どこへやられるのかわかりません。故郷を出てから、長い間汽車に載せられました。そして、いまこの広々とした海の上をあてもなく漂っているのをみると、心細くなるのであります。」と、箱は答えたのです。

月は、そこで、いつたいたれが悪いのかと考えました。そこで、こんどは、人間のようすを見とどけようと思ひました。そして、街へ降りて、あたりを見まわしましたが、もうだいぶんおそかつ

たとみえて、みんな窓がしまっていました。一軒、二階の窓がガラス戸どになってい  
るのがありましたので、月はそれからのぞきま  
した。すると、そこには、かわいらしい赤ん坊あかぼうがちようど目をさ  
まして、月つきを見みて喜よろこんで、笑わらっていたのであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

初出：「赤い鳥」

1925（大正14）年10月

※表題は底本では、「負傷《ふしょう》した線路《せんろ》と月  
《つき》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 負傷した線路と月

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>